

研究フォーラム1

2014年3月30日(於早稲田大学)

**調査報告**

**—多様な言語文化背景を持つ子どもの「ことばの力」の調査**

# 日本生育外国人児童の 作文力の発達

—出来事作文の多面的分析を通して—

齋藤ひろみ(東京学芸大学)

課題番号:23520615 期間:平成23-25年度

研究課題:日本生育外国人児童のリテラシー発達に関する  
基礎研究—日本語作文の縦断調査—

# 1 研究の概要

## (1) 目的

日本で生まれたあるいは幼少期から日本で育っている（以下、日本生育外国人児童）のリテラシーの発達に関し、その重要な要素である書く力の発達を、かれらの作文の分析を通して明らかにすることを目的とする。

## (2) 方法

日本生育外国人児童の作文データを収集し、多様な側面から分析を行い、その結果を統合して、作文力の発達について考察する。

## (3) 結果の社会的・教育意味

日本生育外国人児童への言語教育の内容と方法に関し有益な情報を提供

## (4) 研究テーマと方法に関して

・なぜ**日本生育**外国人児童なのか？(学校教育現場より)

日本生まれ・幼少期来日の外国人児童生徒が増加  
言語面の発達上の課題が見えにくく、教育・支援が不十分  
言語発達の課題は学習に参加し思考するための言語の力

・なぜ**作文**なのか？

学習参加のための言語の力は、読み書き強くに関連

「この子」のことばの発達を見る(縦断調査)

…学校にデータ収集を依頼

⇒ データの限界

プロセスは見られない。書かれた結果としての作文から可視化される極限られた側面

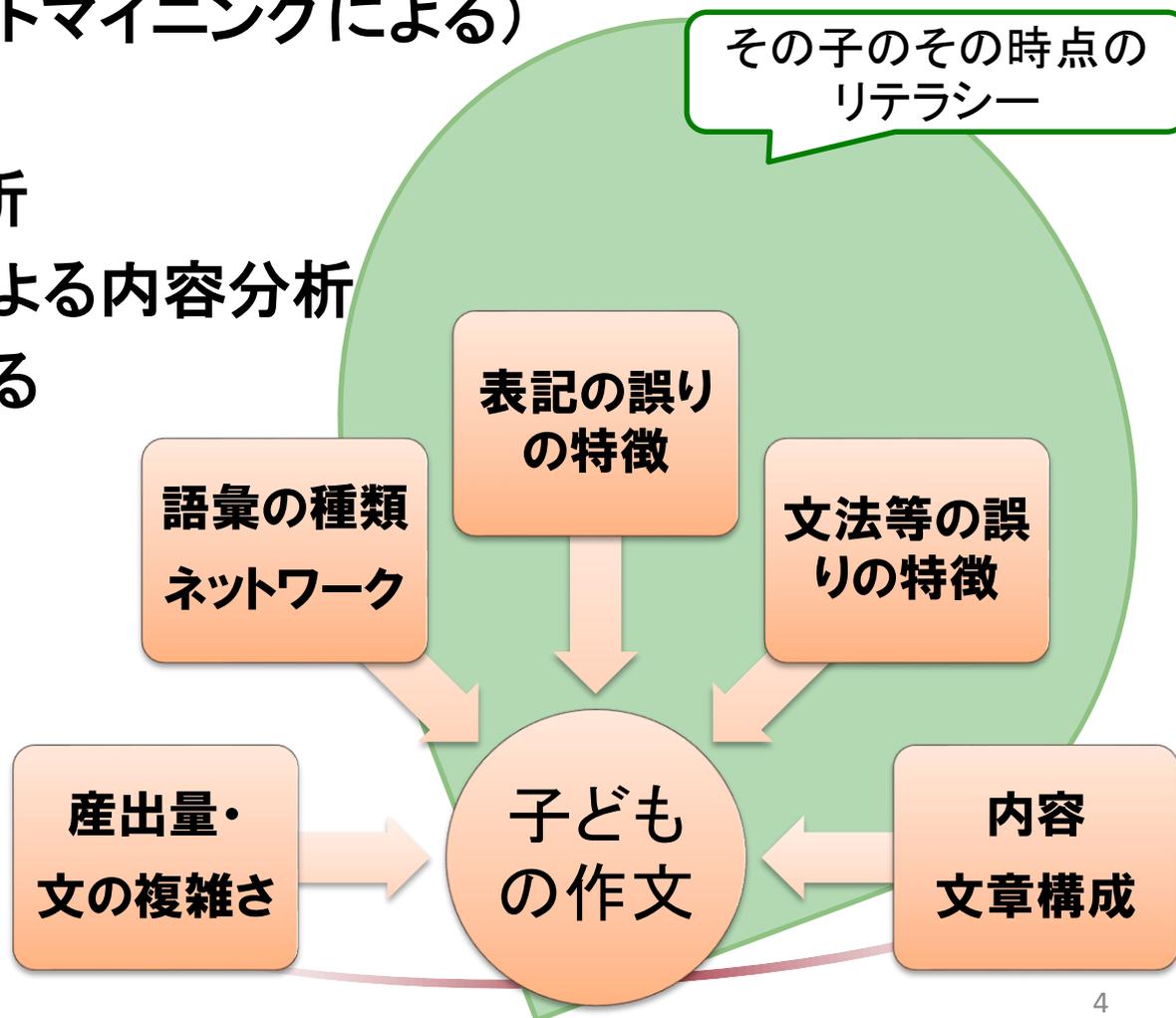
## (5) 多面的な分析

- ①作文の産出量・文の複雑さに関する量的分析
- ②語彙の分析(テキストマイニングによる)
- ③表記の誤りの分析
- ④文法等の誤りの分析
- ⑤ルーブリック評価による内容分析
- ⑥エピソード分析による

内容構成の分析



子どものリテラシー  
発達の総体を捉える  
ための情報  
(材料)



## 2 研究対象

### (1) 学校

- ・首都圏の外国人が集住する地域のA小学校
- ・現在、全校児童(約160人)に占める外国人児童は75%強
- ・日本生まれの外国人児童が80%以上

母国生れは20%以下

(その約70%が就学前来日)

- ・ベトナムが1/2、中国が1/3、その他にカンボジア、ラオス、ブラジル、フィリピンなど

### (2) 作文

- ・2008年より毎年6月に収集
- ・全児童(日本人児童を含む)の作文
- ・「全校遠足」をテーマとする出来事作文
- ・2年生～6年生までの作文
- ・教師の指導が入っていない

### ※外国人児童:

保護者が日本語以外の言語文化を母語・母文化とし、家庭内に日本語・日本文化以外の言語・文化がある児童生徒。日本籍をもつケースもある。

# 本発表の分析対象（縦断調査）

2007・2008年度入学児童の作文（2－6年の5年分の作文）

①産出量・文の複雑さ ②内容分析（ルーブリック評価による）

＋ ③文字の誤り ④文法の誤り ⑤内容構成の分析

外国人 33人

：ベトナム 20人 中国5人 カンボジア5人

ラオス2人 フィリピン1人

日本人 14人

	外国人児童(F)	日本人児童(J)	計	作文数
2007年入学	17	7	24	120
2008年入学	16	7	23	115
計	33	14	47	
作文数	165	70		235

## 4 分析① 産出量と文の複雑さ

### (1) 作文の産出量と文の複雑さ

作文の産出量と文構造の複雑さ、及び漢字使用について計量的に分析

同じ学校で学ぶ日本人児童との比較により、外国人児童の作文の発達の特徴を捉える

### (2) 分析方法

#### ① 第一段階

日本語リーダビリティ測定Ver.0.5.0-UDを利用して分析

リーダビリティ・リサーチ・ラボ

長岡技術科学大学 柴崎秀子氏

<http://readability.nagaokaut.ac.jp/research/html/modules/tinyd0/>

## ②第二段階

リーダビリティ分析結果から得られる次の項目について日本人児童と比較分析

児童の作文には、誤りが含まれているため、文数、文節数、述語数等について、1件ずつ当たって、結果を修正して利用

産出量 : a 文字数 b 文数 c 文節数

文構造の複雑さ: d 1文当たりの文節

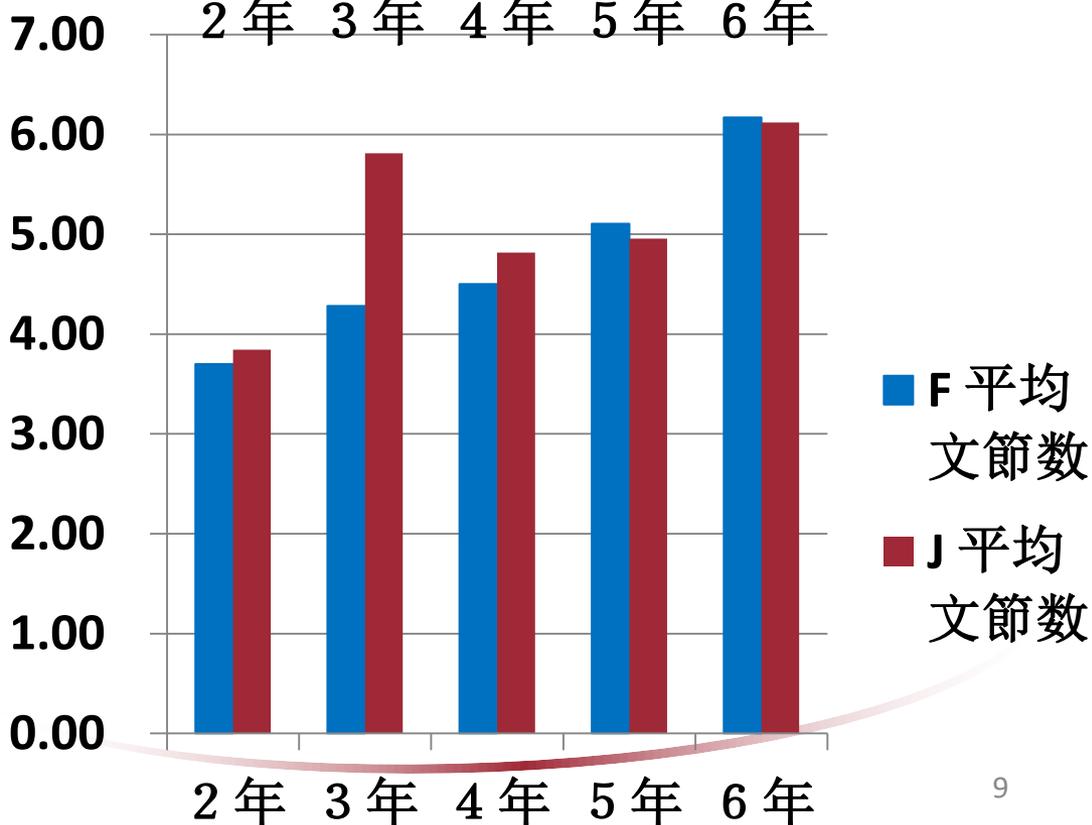
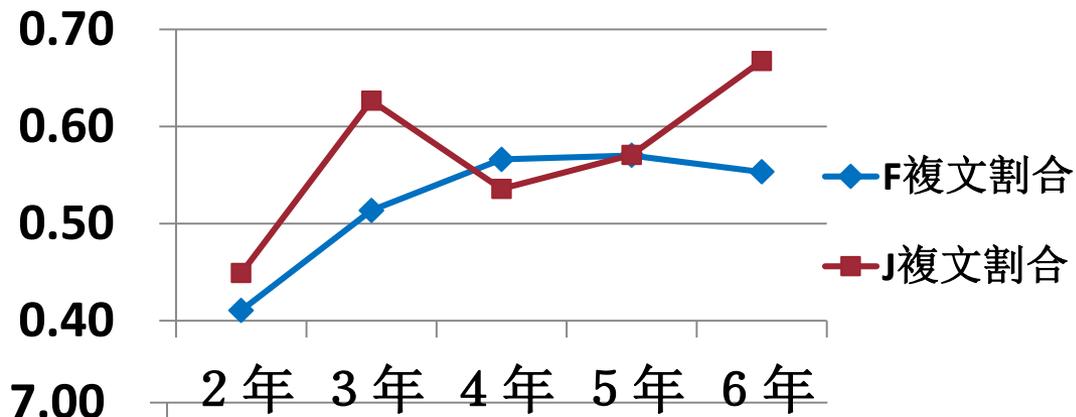
e 複文数 f 複文の割合

g 1複文当たりの述語数

漢字使用状況 : h 漢字使用数

### (3) 分析①の結果

	文字数	漢字
2年F	210.21	8.21
2年J	281.64	10.86
3年F	384.39	21.30
3年J	388.57	28.50
4年F	635.82	54.27
4年J	555.00	60.64
5年F	420.15	48.18
5年J	379.57	50.14
6年F	482.15	67.61
6年J	560.29	101.43



## 5. 分析② 内容の分析

(ルーブリックによる評価で)

### (1) 方法

作文のジャンル: 出来事作文 小学2年～6年

評価観点

1) 文章構成に関するもの

①文と文のつながり ②文章構成・段落相互のつながり

2) 内容関連項目: 内容に関するもの

③出来事 ④描写・状況 ⑤心情・考え

3) 包括的な項目

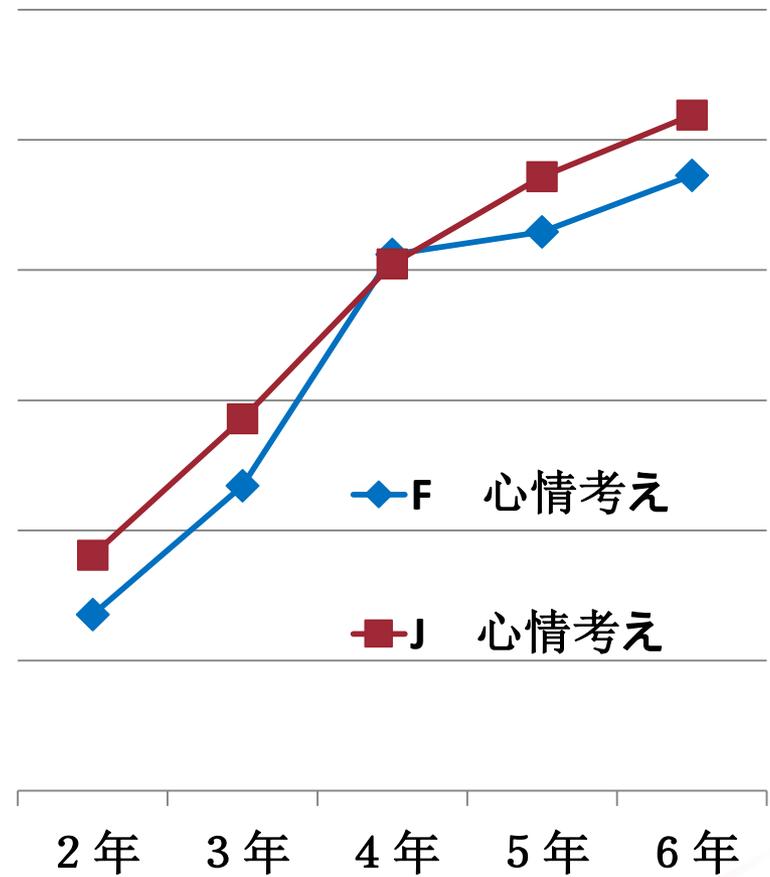
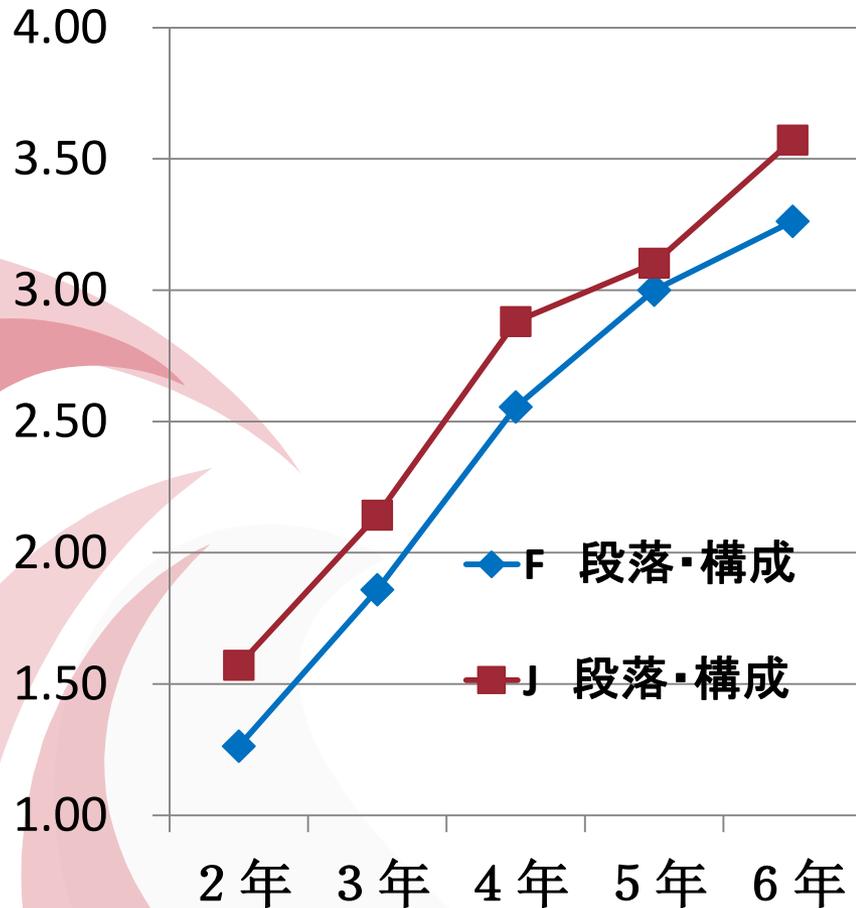
⑥全体的なバランス

	対象	ジャンル	評価観点
生田 (2006)	滞日ブラジル 人中学生	意見文	趣旨の明確さ, 首尾一貫制, 論理の 明確さ, 理由付け, 内容の豊かさ
佐野他 (2012)	トロント在住日 英バイリンガル 小1～中3	紹介文	全体の構成, 段落の構成, 文と文の つながり, 読み手意識, 表現技術, 内 省, バランスのとれた議論

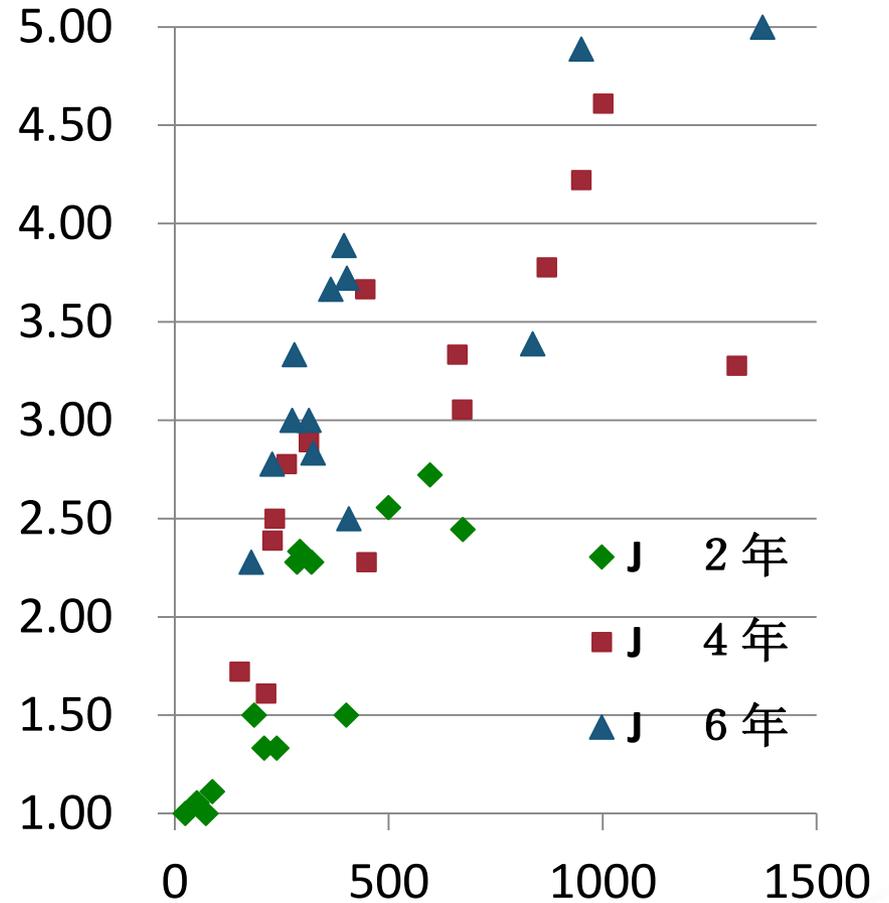
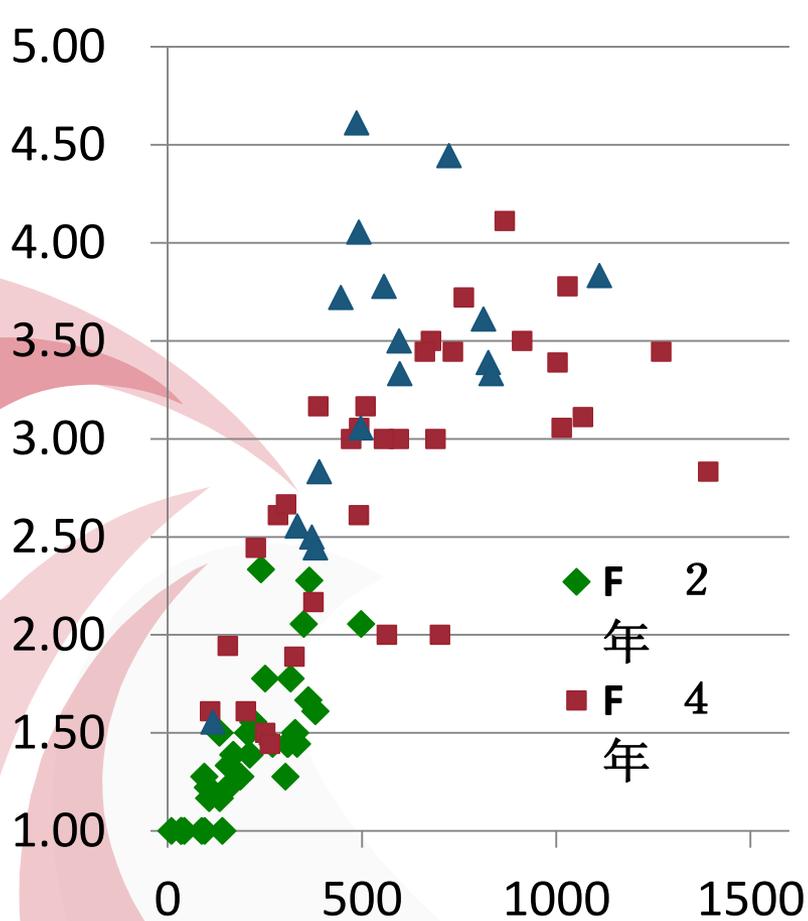
## (2) 分析②の結果(2項目)

### 「段落・構成」と「心情・考え」

評価得点



### (3) 内容評価と産出量(文字数)



## 6 その他の分析結果から①

### <表記の誤り>

- ◇低学年の誤り F > J  
書字力の違いか？  
特殊音 に顕著
- ◇片仮名は平仮名より時間がかかる。語単位では高学年でも誤り F > J
- ◇文法との関わりも...  
助詞の「は」「わ」  
活用形の誤り

### <文法の誤り>

- ◇Fの特徴
  - ・助詞の誤り F>J
  - ・「活用形＋丁寧形」の誤り…正用と語用、複数の形式が同時期に出現
- ◇Fも、Jも  
口語表現が散見

→ 第Ⅱ部で詳しく

## 7 まとめ

### (1) 調査結果から見えてきたこと

#### 1 産出量・文の複雑さに関する計量分析から

- ・産出量は 中学年で FはJと同程度に
- ・文の複雑さは Jが 低学年、高学年で伸びばある  
Fは 徐々に伸びるが高学年では伸びが見られない

#### 2 ルーブリックによる内容評価から

- ・Fは内容面より構成面で、Jより遅れ気味に発達
- ・Jは、高学年の「心情・考え」の項目で更に発達。

○これまで行った2008-2011の作文の横断調査の結果を追認

▲ただし、パッチワーク的な分析

→ 調査結果を包括的に解釈できるようにすることが必要

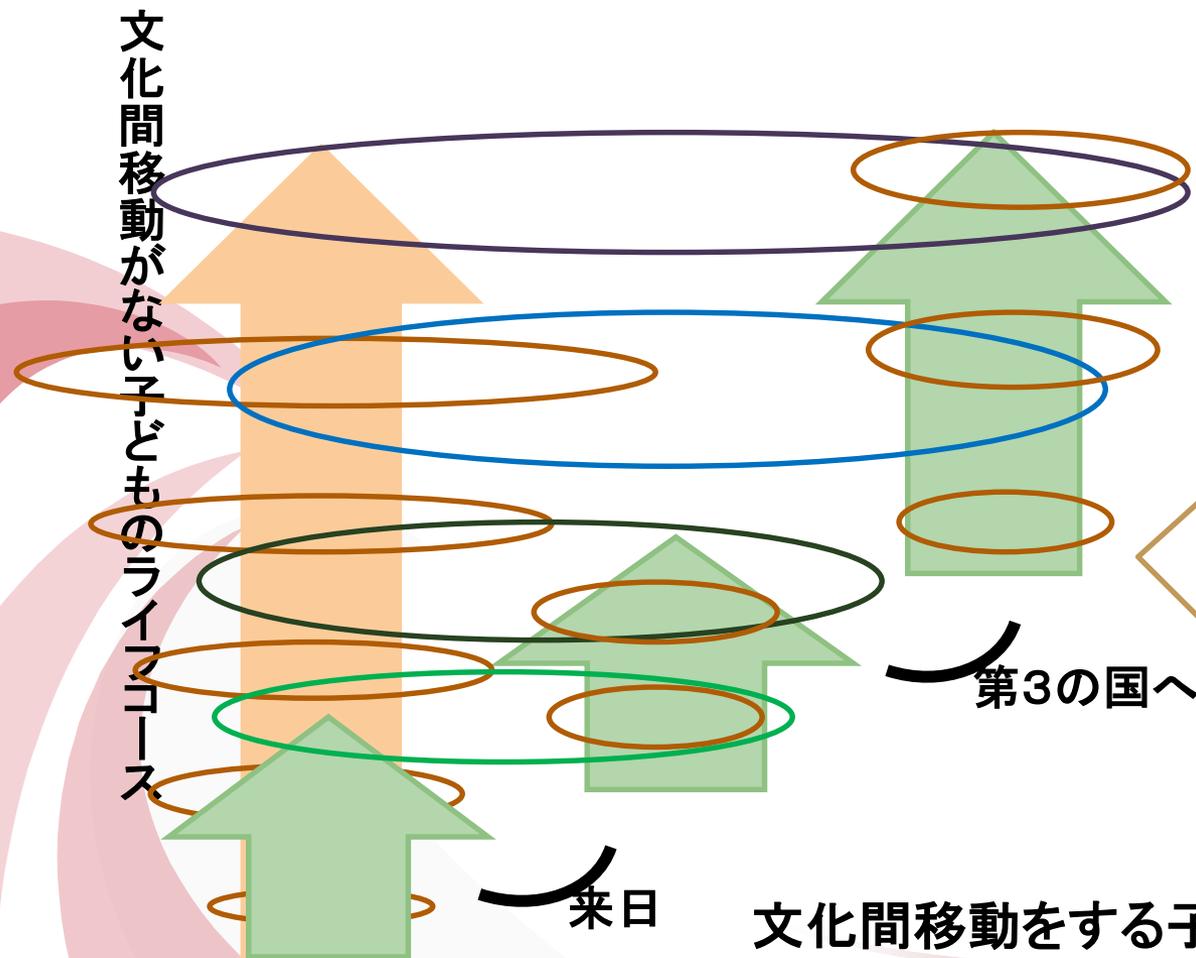
◇地域のこの学校の子どもたちの「言語環境」が影響か？

出来事作文では見られない、力も！

# 6まとめ

## (2) 研究の結果をどう生かすか

文化間移動がない子どものライフコース



### リテラシーに着目

単なる読み書きの力ではなく、  
社会との関わりの中で、  
子どもたちが自身が、ライフコースを拓き、歩むための力として、テキスト（話し言葉も含む）を理解し、編み出す力を育みたい！

文化間移動をする子どものライフコース

# 参考文献

- 生田裕子(2002)ブラジル人中学生の第一言語能力と第二言語能力との関係-作文タスクを通して, 世界の日本語教育12, pp.63-77
- カミンズ・ジム著, 中島和子訳著(2011), 言語マイノリティを支える教育, 慶応義塾大学出版会
- 真嶋潤子(2012), 平成21年度—平成23年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書課題番号21610010 日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語刊行から構築する試み
- 中島和子・ロサナ・ヌナス(2001), 日本語獲得と継承語喪失のダイナミックス-日本の小・中学校ポルトガル 語環境にある子どもの実態を踏まえて[http://www. Japanese teaching.org/ATJseminar/2001/nakaJima.html](http://www.japanese-teaching.org/ATJseminar/2001/nakaJima.html) (2012年5月30日)
- OECD(2006)*Where Immigrant Students Succeed:A Comparative Review of Performance and Engagement in PISA 2003* (齋藤里美監訳(2007)移民の子ども学力 社会的背景が学習にどのような影響を与えるのか, 明石書店
- 櫻井千穂(2013), 日本在住の言語的マイノリティの子どもの子の二言語能力の関係-物語文野聴解・再生課題の分析を通して, 2013年度異文化間教育学会第34回大会発表抄録, pp.130-131
- 佐野愛子・中島和子・生田裕子・中野友子・福川美沙(2012), 海外在住小中学生のバイリンガル作文力—二言語高度発達型と二言語低迷型の質的分析 母語・継承語・バイリンガル教育研究会2012年大会, 5-7.

## 学術研究助成基金助成金(基盤C)

課題番号:23520615 期間:平成23-25年度

研究課題:日本生育外国人児童のリテラシー発達に関する  
基礎研究—日本語作文の縦断調査—

メンバー

森 篤嗣(帝塚山大学)

北澤 尚(東京学芸大学)

菅原雅枝(東京学芸大学)

協力者

内田紀子(茨城大学)

畠田陽子(国立国語研究所非常勤)

阿部志野歩(東京学芸大学大学院修了)

田井聖子(東京学芸大学院生)

田中瑞葉(東京学芸大学院生)